

原不二夫著

『マラヤ華僑と中国：
帰属意識転換過程の研究』

龍溪書舎、2001年

移民の帰属意識が出身国と移住先の間で揺れることは容易に想像がつくが、移住先で定着するにつれて帰属意識が移住先に向かうという考え方に大きな異論はないだろう。では、移民はいったいどのようにして出身国から移住先に帰属意識を移すのか。この問題をマラヤの中国系住民について明らかにしたのが本書である。

本書の議論の焦点の1つは、マラヤ華僑のマラヤでの戦闘に対する解釈である。従来の研究では、マラヤ華僑は第二次大戦中にマラヤにおいて抗日軍として戦闘に参加し、この過程でマラヤへの帰属意識をもつようになったと理解される。これに対し、著者は、マラヤ華僑の抗日運動はマラヤの解放ではなく中国の解放の一環であったとの立場を取る。これを論証するため、著者はマラヤ共産党の幹部の1人1人について調べ上げ、考察を加えている。

このように、本書は膨大かつ多様な資料をつき合わせ、微細なデータまでも丁寧に確認して作られている。しかし、ここではあえてその点ではなく、日本のマレーシア研究に本書を位置づけることで本書の持つ意味を考えたい。

著者は、マラヤ社会が多様な文化背景を持つ人々から構成されている現実を踏まえ、集団間の差別に結びついた形での集団性の強調に向かわないマラヤ社会建設の可能性を一貫して追い求め

てきた。著者が「民族」を「マラヤ民族」の意味でのみ用い、華人やマレー人やインド人を呼ぶときには「種族」としてきたこともその表われである。

この点で著者は萩原宜之氏と好対照をなす。萩原氏は、原住民であるマレー人が移民系である華人やインド人の前に権利を制限されており、しかもスルタンを頂点とするマレー人伝統的支配層にはそれを打破するだけの力がなかったとの認識のもと、マレーシア政治史上初の「平民」首相であるマハティールがマレー人の地位向上を実現してきた過程としてマレーシア現代史を描こうとした。さらに1990年代には華人社会の詳細な分析を行った金子芳樹氏が登場し、萩原氏の後を継いでマレーシア政治研究の中心的な立場に立つが、こちらも種族性の強調を受け入れた上での華人ブロックの研究であるという意味では萩原氏の研究と共通している。

現実のマラヤ社会は種族性を強調してマレー人の特権を認めた社会建設に進み、このことがこれらの学説に説得力を与える役割を担ったことは確かだろう。これに対し、著者は一貫してこの学説に挑戦し続けてきた。本書はその結果であり、その意味で、マラヤ華人研究の1つの到達点としてだけでなく、新たなマラヤ研究に向けての出発点としても、より多くの人に読まれるべきであろう。

(山本博之／東京大学)

西井凉子著

『死をめぐる実践宗教：

南タイのムスリム・仏教徒関係へのパースペクティブ』

世界思想社、2001年

2001年9月11日の米国同時多発テロは、イスラム文明に属する人々と西洋文明に属する人々との間にある深い断絶を象徴する事件として語られ、この断絶を乗り越えるための試みは、もっぱら、イスラム社会に対するより深い理解、たとえば、非イスラム社会に対する寛容やイスラム社会内部の多様性についての理解を促す、という形で行われてきた。しかし、そこでの力点はイスラム教の論理に向けられた誤解を解くことであって、イスラム教を信奉する人々やその社会についての説明はイスラム教の論理を擁護するための事例として扱われていたように思われる。

これと対照的なのが本書である。著者は宗教の教義やその論理ではなく、宗教を実践する主体の側の論理を重視すべきとの立場を取る。なぜなら、著者が南タイの西海岸地域で出会ったM村では、イスラム教徒と仏教徒の通婚、イスラム教徒の仏教徒化、イスラム教徒の出家などが社会的に認知されていたからである。

一見すると宗教が規定する規範からの逸脱に見えるこれらの現象を、著者は実践宗教という観点から分析し、M村では、善行(ブン)と悪行(バーブ)を知り、来世のために善行を積み、現世のための願掛け(ボン)を行う方法としては仏教もイスラム教も同じものであると認識されていることを突き止める。そして、現世の利益のために行われる願掛けはイスラム教、仏教、精霊信仰などさまざまな形で行うこ

とが可能であるのに対し、子が死んだ親に対して行うことで実現する「来世における功德」は宗教を同じくする子によってしか行えないため、人は最終的には特定の宗教を選択することを明らかにした。

ここで重要なのは、個々人が自分の属する宗教に最終的に拘束されるという点ではなく、生きている間は、異なる宗教を信奉するものどうしが、親子関係や親族関係、近隣関係を維持するために互いに相手の宗教と折り合いをつけやりくりをしながら暮らしているという点である。

また、来世における幸福は生前個人として宗教と向かい合うだけでは実現されず、死後、こどもが親にブンを送ることによって実現されるという状況は、死と直面してさえも、自分と異なる他者と折り合いをつけて関係をつくることが求められているということでもある。M村は、願掛けや功德の実現のために他者との関係を結ばざるを得ない状況が先にあり、その中で宗教の差異をやりくりすることを試みる社会である。

本書を例外的な事例を扱っていると見るのは間違いだろう。差異はつくられたものである、あるいは差異は求められているものであるという視点からさらに歩みを進め、すでにある差異を乗り越える試みを人はするものであるという点を指摘する本書は、対立を強調する民族／エスニシティ論に一石を投じるものである。

(西芳実／東京大学大学院・博士課程)

立本成文著

『共生のシステムを求めて：

ヌサンタラ世界からの提言』

弘文堂、2001年

本書は、国民国家に基づく社会システムの限界を指摘し、それに替えてヌサンタラ世界の社会システムを提言するものである。

筆者は、国民国家システムは生態空間を区切り、人々を集団に区切り、「一つの民族が国民として独立の国家を形成する」ことを至上とする結果、多数派が少数派を差別・排除したり、同化を迫ったりするなど、民族紛争に結びつくとして指摘する。また「ひとたび国家が形を整えると、民族の誇り、国家の威信が表に出てきて、追いつく努力、そのためのイデオロギーが求められ」、「近代化・開発・発展至上主義、独裁・社会主義」を容認し、「『無理』を重ねて産業文明を高度化」し、環境破壊を招くとする。

これらの問題の解決策として、筆者は「ヌサンタラ」世界の社会システムの導入を提案する。「ヌサンタラ」とは、本書によれば「東北アジアからオーストラリアやインド洋まで続く群島群」を指す。ここでのコミュニティのあり方とは、二者関係に基づく人間関係であり、カリスマ的リーダーの周りに構築される「圏」的なもので、地域や人間集団を区切るものではない。それは、全ての人に画一的な関係を押し付けるのではなく、相手との関係によって様々なあり方を見せうる柔軟なもので、ばらばらなのに一緒という状況を生み出し、共生を可能にする。カリスマとは人だけでなく、大地や空気といったものにも見出し

うるもので、それらへの帰属意識＝「エコ・アイデンティティ」を持つことで、自然との共生も可能となる。

筆者はコミュニティより上のレベルを「コミュニティ」と呼び、それを国民国家に代わる単位として提案する。「コミュニティ」とは、様々なコミュニティの人々が交易をするために集まる市場や都市に存在する社会であり、生活世界の一部を成す。これは、国民国家同様、秩序やルールを乱す逸脱者を管理する機関が必要であるが、より小さな単位であるため、合法的な法と制度のシステムが機能しやすく、暴力装置を最小の規模に抑えることができる。そして、それらが重なり合い連鎖することで、またそれ全体を俯瞰して統合する地域システムを置くことで、独裁をチェックすることも可能となる。最終的に、互いの存在を認め合う地域システム間の対等な連合により、世界秩序が構成されていくべきだとする。

筆者がフィールドで得た豊かな事例に加え、歴史面での深い考察が、「ヌサンタラ」世界のイメージを見事に提供してくれる。領域を区切り、人間を集団に区切ることに様々な問題の発端があることが指摘されているが、区切ること自体はさしあたり受け入れ、それぞれの区切りの中にいる構成員が納得するような富の分配法を模索することも、「共生」の実現につながるように思う。

(篠崎香織／東京大学大学院・博士課程)

服部美奈著

『インドネシアの近代女子教育：
イスラーム改革運動のなかの女性』

勁草書房、2001年

本書は、20世紀初頭の蘭領東インドすなわち現在のインドネシア、西スマトラに誕生した近代的女子イスラーム学校、ディニア・プトリの歴史を、蘭領東インド時代から現在まで跡付け、西スマトラにおける近代女子教育の発展過程と特徴を明らかにしたものである。記述は、20世紀初頭のモダニティ(モデルン)模索とディニア・プトリの誕生、独立直後の国民国家形成期(1945-65年)におけるディニア・プトリの教育再編、スハルト「開発」体制下(1965-1990年)におけるディニア・プトリの女子教育理念の再確認という順序でなされており、イスラームの女子教育に対する各時代の要求と、それにディニア・プトリがどのように応えてきたかがよくわかる構成になっている。また、創立者の思想、学校の方針・カリキュラムだけでなく、卒業生のライフ・ヒストリーの叙述によって教育を受けた側に与えた影響についてもうかがい知ることができる。

著者は、20世紀初頭、母系制社会の慣習を背景に持つミナンカバウ人がなぜ女子に教育が必要であると考え、また、どのような教育を女性に施すことが彼らの近代化につながると考えたのかという問いを、西洋派、慣習法派、伝統派ウラマー、改革派ウラマー、また各派の女性達との議論を紹介しながら論じている。この記述から、当時西スマトラにおいて雑誌、新聞、著書などの出版物を通して多

様な意見が自由に交換されていた状況と、議論を展開させることによって互いに影響を与え、各派ともに自らを改革する道筋ができていく過程を読みとることができる。イスラーム改革派は、エジプト等のイスラーム先進地域を手本として女子に礼儀作法を学ばせる一方で、近代化と地域社会に適合するイスラーム法の解釈を行い、日々の生活習慣に関する具体的で詳細な規定を再確認していった。彼らは西洋とは異なるムスリム女性像を追究し、最終的に、家庭と社会におけるムスリム女性としての生き方の基本を作りあげ、子供達を教育した。

こうして1920-30年代に形成されたディニア・プトリの教育理念は、スハルト体制下において「開発」政策下の「女性」の位置づけとの整合性を求められるようになった。女性には妻、母、職業人という3つの役割と責任が与えられているという政府側の説明は、一見ディニア・プトリの教育理念と「開発」政策がまったく同一のものであるという錯覚を起こさせる。しかし、体制側との協調行動を取りながらも、全ての行動の根元にあるものはアッラーへの奉仕であるという主張を強調することを通じて自分たちの存在を埋没させずに絶えず存在理由を明示する彼女たちの積極的な姿勢を、読者は読みとることができる。

(菅原由美／東京外国語大学 AA 研非常勤研究員)

明石陽至編

『日本占領下の英領マラヤ・シンガポール』

岩波書店、2001年

本書は、1994年から4年間にわたって組織された「日本の英領マラヤ・シンガポール占領期フォーラム」による研究成果をもとに、池端雪浦編『日本占領下のフィリピン』の姉妹編として刊行された論集である。

明石は序章において、近年の日本、マレーシア、シンガポールにおけるマラヤ・シンガポール占領・軍政研究に対する関心の高まり、特に国際的視野に立つ研究の増加と、経済・宗教・教育・運輸などの諸問題への研究視野の拡大を指摘し、本書の目的はこうした新しい研究動向をさらに一步前進させる試みである、と位置付けている。特に、本書における研究史への新しい貢献として、第一にマレーシア、シンガポール、インド、オーストラリア、イギリス等に散在している史・資料を利用した総合的な分析を行っていること、第二に、従来の政治・人種史中心の研究ではなく経済、鉄道、敵性女性抑留者の問題などを扱うことによって、占領期が戦後のシンガポール・マレーシアに及ぼした影響に考察の視野を拡大していること、が注目される。

本書は、以下の8篇の論文によって構成されている。

第一章 渡邊軍政—その哲理と展開(1941年12月～43年3月)...明石陽至

第二章 抗日戦争期のマラヤ共産党幹部...原不二夫

第三章 シンガポール大検証について——現地住民と日本人の記憶の齟齬を巡って——...舩谷 鋭

第四章 日本占領下のマラヤにおける鉄道運営事情...太田弘毅

第五章 日本軍政下のマラヤの経済政策——物資調達と日本人ゴム農園——...吉村真子

第六章 スマトラ・ボルネオ石油と日本軍政...山崎功

第七章 シンガポール民間人女性抑留所——POW-WOWの世界——...中原道子

第八章 “昭南”の降伏...ヘンリー・フライ(波多野澄雄訳)

ここで各章の内容を個別に紹介することはできないが、以上のように極めて多岐にわたるテーマが扱われており、近年の日本占領期研究に対する関心の拡大を明確に見てとることができる。なかでも第四、五、六章の三つの章が軍政下の経済に関わる諸問題に当てられていることが、本書の特徴と言えるだろう。また、各章はそれぞれ戦後との連続性を視野に入れて問題を設定しており、歴史研究者のみならず現代マレーシア・シンガポールに関心を持つ様々な分野の研究者にとっても有益な示唆を与えてくれるであろう。

ただし、各章のテーマはどちらかというとアトラン

【新刊紹介】

ダムに選択された観があり、それらを有機的に統合して日本占領期のマラヤ・シンガポール社会の全体像を提示するところまでは至っていない。そのような目的を達成するためには、恐らく、他の時代を

専門とする歴史研究者、あるいは歴史学以外のディシプリンの研究者とのより幅広い交流が必要とされるものと思われる。

(國谷徹／東京大学大学院・博士課程)

野村亨訳注

『パサイ王国物語：

最古のマレー文学』

平凡社、2001年

スマトラ島の北部地域は、インド洋方面からの来航者が初めて出会う東南アジアである。龍脳、安息香などの香料や金を豊富に産出したこの地域は、古来多くの交易商人を引き付け、バルス(アラブ人にはファンスールという名で知られた)などに代表される港市が発展した。さらに近世に至る頃には、インドからもたらされたコショウの栽培が内陸部で盛んとなり、この地域の港市はコショウ輸出によって一層の賑わいをみせた。無論、港市を中心とした政治権力の形成も進み、多数の港市国家が成立した。例えば、13世紀末あのマルコ・ポーロが中国からの帰路に寄港したプルラック、ムラカの崩壊後の16世紀初期以降に興隆したアチェなどが挙げられるが、パサイもそうした港市国家のひとつであった。当初サムドラ(スマトラという名称はこの港市国家に由来する)という名で知られたパサイは、14-15世紀にスマトラ産の安息香、コショウ、金やマルク諸島産香料の集散地となった。そして、ムラカが興隆するまで、マラッカ海峡地域における交易とイスラーム

の中心地として繁栄を誇った。

周知のように、近世の東南アジアでは、ムラカ、ブルネイ、アチェ、パタニ、ジョホール、ジョホール・リアウなどのムラユ系港市国家群が交易とイスラームの中心地として栄えた。その繁栄の様子は、当時来航したヨーロッパ人たちの諸記録からも窺い知ることができる。とはいえ、よりいきいきした筆致でその栄華を伝えているのは、やはりそれらの港市国家が編纂した歴史叙述作品であろう。ムラユ系港市国家の歴史叙述作品としては、ムラカの『スジャラ・ムラユ(ムラユ王統記)』が有名である。だが、残念ながら、その日本語訳はまだ刊行されていない。そうした中、この度野村亨氏によって、“**Hikayat Raja-Raja Pasai**”の訳注書が『パサイ王国物語』というタイトルで平凡社の東洋文庫シリーズから刊行された。これは、現在我々が日本語で味わうことのできる唯一のムラユ系港市国家の歴史叙述作品であり、その意味で大いに注目されるべき書である。一般読者はもとより我々研究者にとっても、近世の

ムラユ系港市国家に対する理解を深める上で有用なこの書の刊行を歓迎するとともに、訳注を担当された野村氏のご努力に敬意を表したい。

『パサイ王国物語』には、この王国の形成、イスラームの受容、交易とイスラームの中心地としての繁栄から衰退に至るまでの歴史が叙述されている。ただし、それは、いわゆる客観的な歴史の叙述ではない。王権の支配の正統性を示すために編纂されたものであり、宮廷の支配層に共有された世界観の叙述という性格を多分にもっている。これは、ヒカヤットあるいはスジャラというジャンルに分類されるムラユ語の歴史叙述作品に共通する特徴である。したがって、こうした古典文学作品を読む際にはかなり注意が必要となる。だが、野村氏の訳注書には丁寧な解説が付されているので、我々読者はさほどの困難もなく、その叙述の意味する内容を的確に理解しながらこの作品を読み進めることができよう。

『パサイ王国物語』という作品が特に注目される理由は少なくとも2つある。ひとつは、『スジャラ・ムラユ』などのモデルとなった最古のムラユ語の歴史叙述作品という点である。もうひとつは、東南アジアの在地住民のイスラーム受容の過程を描写した作品という点である。こうした点についても十分な解説があるので、読者はこの作品の意義を容易に理解できよう。その他、興味深い点として、ミナンカバウという民族名称の起源説話に言及し、また他のムラユ諸国の歴史叙述作品にも共通する「竹の中から出現する王女」や「象に乗って登場する王子」などの説話が収録されていることが挙げられよう。訳注

書はこのような点にも配慮し、インドやムラユ諸国の作品にみられる類似の説話やパサイに関する漢文史料の抄訳を関連文献抄訳の項に収録している。したがって、読者は、この訳注書を通して、インド文明の影響やインド洋海域世界における港市国家パサイの実像といった問題へもアプローチすることができる。歴史以外の研究者諸氏にもぜひ一読をおすすめしたい書である。

なお、当時のパサイ王国については、同じ平凡社の東洋文庫シリーズから刊行されているイブン・バトゥータの旅行記(イブン・バトゥータ[イブン・ジュザイ編、家島彦一訳注]2001『大旅行紀 6』平凡社)や歴史研究者弘末雅士氏が近年発表した諸論考(例えば、弘末雅士 1996「近世スマトラ内陸民族世界の形成における移住者の役割:「土着先住民」の創出」『東洋史研究』55。弘末雅士 1999「東南アジアの港市国家と後背地」佐藤次高・岸本美緒編『地域の世界史 9:市場の地域史』山川出版社)が参考になる。前者は、パサイに関するより客観的な歴史が叙述されている。他方、後者は、上記のミナンカバウの起源説話や「竹の中から出現する王女」「象に乗って登場する王子」などの説話の背景やその意味について考察を加えている。したがって、それら作品や諸論考も併せて読むならば、ムラユ系港市国家の構造をさらに深く理解でき、また「イスラームを受容した王権の歴史叙述になぜ非イスラーム的な説話が収録されているのか」「なぜスマトラ北部の王国の歴史叙述作品にミナンカバウ民族が登場するのか」といった疑問も氷解しよう。(西尾寛治/東京女子大学)

望月雅彦著

『ボルネオに渡った沖縄の漁夫と女工』

ボルネオ史料研究室、2001年

著者の望月氏は、明治期から第二次世界大戦にかけての時期を中心に日本とボルネオの関係を研究してきた人物である。著者には農業移民を扱った著書『ボルネオ・サラワク王国の沖縄移民』があり、続く本書では漁業移民を扱っている。

本書の主な舞台となるのは北ボルネオのタワオ（現タワウ）である。日本で南進論が沸きあがっていたころ、台湾総督府は南洋開発組合を作り、タワオに拠点を作って日本人の進出を助ける役割を果たした。台湾総督府に赴任していた折田一二がこれを足場にして1926年に設立したのがボルネオ水産会社だった。ボルネオ水産が主としたカツオ漁では生餌が不可欠であり、そのため求められたのが沖縄の餌取り漁夫だった。ボルネオ水産では、沖縄出身の漁夫が餌を取り、高知出身の漁夫がその餌でカツオを釣るという役割分担が存在した。さらに、釣ったカツオを加工してカツオ節を作る作業にも沖縄出身の女工が求められた。沖縄出身者はボルネオ水産にとって不可欠の存在だった。

そこで、タワオをはじめとする北ボルネオでの日本人漁業従事者の実態を明らかにするため、著者は、①沖縄出身のカツオの餌取り漁夫、②漁業移住団として沖縄から北ボルネオに出漁した船員、北ボルネオへの漁業移住団の女子団として渡った缶詰女工と鰹節女工などを対象に聞き取り調査を行った。それをまとめたものが本書である。

また、本書の後半では第二次世界大戦の開戦から日本の敗戦までの北ボルネオの様子を描いている。「アピ事件」や「北ボルネオ死の行進」など、当時この地方で起こったできごととも取り上げられているが、本書はそれらをカツオ漁に関わっていた人々への聞き取り調査によって語ろうとしている点で珍しく、貴重な試みとなっている。

ところで著者は、膨大な聞き取り調査の結果をなるべくそのままの形で読者に提供することを心がけているためか、それらをどう読み解くのかについては極めて禁欲的な態度を貫き、自ら多くを語らずに解釈を読者に委ねている。したがって、ときおり見え隠れする台湾の位置づけなどを含め、いくつかの興味深いことがらについても読者は想像をたくましくするしかないことになる。

この話題に不案内な読者の手助けとなるものとして「カツオ・かつお節研究会」（カツカツ研）がある。カツカツ研は、その名の通りカツオとかつお節を通して人々のつながりを捉えようとする研究会であり、興味深いことに、望月氏が沖縄で聞き取り調査を始めたのとほぼ同じ頃に発足している。ウェブサイトでニューズレターを公開しており、その第6号では沖縄の特集が組まれている。それによれば、こちらも研究成果の出版に向けて準備が進められているらしい。本書とあわせて読むのが楽しみだ。

（山本博之／東京大学）

宮城大蔵

『バンドン会議と日本のアジア復帰：

アメリカとアジアの狭間で』

草思社、2001年

1955年4月、アジア・アフリカの新興独立国家29カ国によって、インドネシアのバンドンでアジア・アフリカ会議(以下バンドン会議)が開催された。本書は、バンドン会議に招請された日本がこの会議にどのように取り組み、どのように参加したかを、日米英の政府外交文書などを用いて明らかにしようとしたものである。

著者の関心は、表題にも示されているように当時の日本がアジアとアメリカの狭間であってどのように自らを位置づけようとしていたかを見ることにある。アメリカの占領下から独立を果たした1950年代の日本は、大東亜共栄圏の盟主としてではなく新しい日本としてアジアへ復帰するあり方を模索していた。その一方で、日本は、アメリカの「ドルと核の傘」から離れて独立を維持することが考えられない状況にあった。そして、当時のアメリカは中国に対して強硬姿勢をとるなど、反共色の強いアジア外交を展開していた。

こうした状況下で当時の日本がアジアへの復帰を果たす道は3つあった、と著者は論じる。第一は、「反共」姿勢をアジアにおいても明確に打ち出すことでアメリカとの協調を維持しながらアジアへの復帰を果たす道である。しかし、これには、韓国側に日本との協力を望まない動きがあり実現が困難であるという問題に加えて、復帰を果たす「アジア」の

範囲を反共諸国だけに限定してしまうという問題があった。第二の道は、アジアの冷戦に対しては中立の立場を取り、中国に対しては融和的な姿勢をとるコロンボ・グループを通じてアジアに復帰する道である。これは、「アジア」の範囲を広めるだけでなく、日本の経済復興を助ける中国との関係構築にもつながる道だったが、日中の接近を嫌うアメリカとの関係を悪化させるというリスクがあった。

日本が実際にバンドン会議の場を通じて実践したのは第三の道だった。それは、自由主義陣営の立場を維持して共産主義や中立主義をとる諸国と一線を画す一方で、アジアとの具体的な関わりという点ではそれ以上の政治的立場を明確にせず、経済提携や賠償問題の進展といった経済面に重点を置いた関わり方を強調するというものだった。著者はこうした日本の態度を「死活的に重要なアメリカとの関係を保ちながらも、その意向に沿って、分断されたアジアの一方を選ぶという『耐えがたい』選択を避けようとするものであった。」(p.196)と評価した。

分断されたアジアの一方を選ぶことがどのような意味で「耐えがたい」ものだったかという点については議論の余地が残る。しかし、アメリカという大国に依存せざるを得ない状況と外交政策において政治的主張がないという現象とを結びつけて日本の外

【新刊紹介】

交政策には独自性がないとする議論に対して、「政治的主張をしない」ところにこそ独自の政治的立場が表明されていたことを読み取ろうとした点で、本

書は他の事例にも通じる視点を提示していると評価できるだろう。

(西芳実／東京大学大学院・博士課程)

Tachimoto, Narifumi Maeda

The Orang Hulu:

A Report on Malaysian Orang Asli in the 1960's.

Subang Jaya: Center for Orang Asli Concerns. 2001.

本書は、ジョホール州のエンダウに住むオラン・フルの人びとについての良質の民族誌である。オラン・フルは、マレーシアの先住民オラン・アスリの1グループで、ジャクン(Jakun)とも言われる。著者である立本成文教授(以下、立本先生と記す)は、1965年から1966年にかけて8ヶ月の現地調査を実施した(2年後に再訪)(本書p.viii参照)。その成果は日本語・英語で数多く発表されていることは周知の通りである。オラン・フルについて書かれたものとしては、2000年に京都大学学術出版会から刊行された『家族圏と地域研究』がある。

本書の出版のきっかけは、COAC(Center for Orang Asli Concerns)の主宰者でオラン・アスリ研究あるいはオラン・アスリをめぐる社会運動において現在最も活躍しているColin Nicholas博士が立本先生の英語論文(*Economic Activities among the Orang Hulu*. Discussion Paper No.23. Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 1971)に注目したことによると推察している。その立本先生の英語論文をColin博士に紹

介したのは私であるが、実はそもそも Colin Nicholas 博士を優れた研究者であるとして私に会うように薦めてくれたのは立本先生であった。その後、Colin 博士は京都大学の東南アジア研究センターに客員研究員として2001年10月に1ヶ月ほど滞在している。

本書は民族誌であるが、歴史的資料でもある。COACは、同2001年にスムライ(Semelai)についての民族誌も出版している(Hoe Ban Seng 2001 *Semelai Communities at Tasek Bera: A Study of the Structure of an Orang Asli Society*)。それも本書と同様に1960年代のSemelaiについての歴史的資料となっている。なぜCOACがこれまでにあまり目にとまることの少なかった民族誌の復刻版を出版しているのかというと、理由はおおよそ2つほど考えられる。

1つは、今日のオラン・アスリ社会においては、本書に書かれているようなオラン・アスリの文化は、開発や市場経済化などの社会変化のなかで失われてしまったからである。Colin博士はそれを「文化喪

失(de-culturalization)」と呼んでいる。その一方で、オラン・アスリ自身によって組織される POASM (Persatuan Orang Asli Semenanjung Malaysia)は、オラン・アスリの「伝統的文化」の再発見・再創造に努めている。それを支えているのはこうした民族誌の存在である。現実の社会ではもはや本書に書かれているような文化現象を観察することは難しい。彼らオラン・アスリは本書のような歴史的資料を通じて自らのアイデンティティを確認しているのだ。

またもう1つの理由——これはだいぶうがった見方だが——としては、民族誌が裁判資料になりうるという状況である。スランゴール州の Bukit Tampoi に住むオラン・アスリー・トゥムアン (Temuan)——の人びとが、新空港建設に伴う高速道路建設のため回収された土地の補償をめぐって州政府と開発会社に対して訴訟を起こしていたが、最近になってオラン・アスリ側の土地の伝統的所有が認められ、第一審で勝訴したという出来事がある。勝訴することで土地を失った彼らには損害賠償金が支払われるのかもしれないが、失われた土地は2度と帰ってこない。その裁判には Colin 博士も関わっていたのだが、博士によればオラン・アスリの土地の所有を証明する証拠資料として提出されたのは、イギリス植民地時代の公文書や歴史文書とともに人類学者による民族誌であったという。今日、オラン・アスリの集落の多くは、開発プロジェクトによる土地の回収の危機にさらされている。エンダウのオラン・フルも例外ではない。今日、彼らの居住地の上流地域は国立公園に指定され、観光開

発が進んでいるという。

まえおきはこれくらいにして、本書の内容について述べたいと思う。本書は2部構成で、前半の経済活動に関する上記論文と後半の社会秩序に関する論文 (*Authority and Leadership among the Orang Hulu*. Discussion Paper No.24. Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 1971)から構成されている。それぞれ日本語論文も存在するので、実はここで私がコメントすることはほとんどない。本書の紹介を編集担当の山本博之氏に依頼されたときに私が躊躇した理由は、私には言うべきことが実際にはほとんどなかったからだ(もちろん悪い意味ではない)。しかし、多くの方々にぜひ読んでいただきたいと思ったのでこうして紹介させていただくことにした次第である。以下、私の感想を簡単に述べてみたい。

本書を一読すれば、本書で提示されているデータの詳細さと立本先生のオラン・フルの文化に対する理解の深さに驚かされるであろう。8ヶ月ほどの調査で収集したデータなのだという。立本先生の修士論文はオラン・フルについてであるというから、修士課程の院生時代の調査であったと推察される。恐るべきことである。今日、私のような若手の人類学者が提示しているデータを立本先生がどのように思っておられるのかを想像するだけで恥ずかしくなる。また、手書きの図表や地図なども多数掲載されている。フィールドワークは紙と鉛筆さえあれば何とかなると言っていた人類学者がいたが、彼の言っていたことが正しいことは本書によって証明されている。立本先生がたぐいまれなフィールドワーカーである

【新刊紹介】

ことは知られているが、それは本書を改めて読んで納得した次第である。

本書には多くの写真が掲載されている。それらは当時の人びとの様子を如実に伝えている。また、貨幣経済の浸透についてのデータが盛り込まれている。その後、オラン・アスリ研究では未だに貨幣経済の浸透が彼らの社会が「近代化」していることを表現するためにしばしば言及されるが、それはすでに1960年代から始まっていることであり、写真で見ると、今日の彼らの生活と変わらないようである。そう考えると、彼らの社会は急激に変化していると言われるが、実際にはマレー人ほどには変化していなかったのではないかと推察される。その理由を考えてみるのも興味深いことであろう。

立本先生はオラン・フルの社会構造を詳細に分

析することによって、マレー人とオラン・フルのリーダーシップは同じようなものだという結論を述べている。マレー人とオラン・フルは一見するとまったく異なった民族である。しかし、立本先生は事象の表層を見るのではなく、深層を理解する必要があると示唆している。この結論は極めて示唆に富むものであろう。

今夏、私はマレーシアを訪れる機会を得たが、本書はマレーシアのマラヤ大学の書店をはじめとした主要な書店で売られていた。つい嬉しくなって、また1冊買ってしまった次第である。

(信田敏宏／東京都立大学)